多くの人に参加してほしい

「夜のお茶っこ会」岩手で開催

コープかながわ・コープとうきょう

いわて生協が、仮設住宅で暮らす方々のふれあいの場づくりのために定期的に開催している「お茶っこ会」。6月30日には、コープかながわが主体となった「夜のお茶っこ会」が開催されました。

夜なら、たくさんの人が集まれる！

コープかながわは、6月30日、岩手県の陸前高田市にある2カ所の仮設住宅で「夜のお茶っこ会」を同時開催しました。この企画には、コープかながわの職員、組合員理事、活動企画委員の計14人と、コープとうきょうの職員2人がスタッフとして参加しました。

この「お茶っこ会」のきっかけとなったのは、今年の3月23日、いわて生協監事・被災地支援担当（当時、組合員理事）の飯塚郁子（いいづかいくこ）さんがコープかながわを訪れ、行なった被災地報告会でした。「何か被災地での取り組みをしたい」と考えていたコープかながわの関係者に飯塚さんは、「夜のお茶っこ会をやってみては？」と提案しました。コープとうきょうでも、飯塚さんより同様の提案があり、活動に取り組むことになったといいます。

「お茶っこ会」は、通常昼間に開催され、参加者のほとんどは女性です。仕事がある人は参加できず、また、男性が参加しても、女性が大半を占める環境では居場所がないと感じ、来なくなってしまうといいます。そこで飯塚さんは、お酒やおつまみなどを出し、男性を含め、多くの方が来やすい夜に「お茶っこ会」を開催することを思いつきました。

本音で語り合える場をつくる

開始時間の18時になると、集会場には続々と仮設住宅の居住者がやってきました。参加者は、女性と子ども17人、男性8人で、集会場はすぐにいっぱいになりました。

お茶っこ会のお礼の手紙を書く子どもたち。

参加した男性たちは、30～70歳代と幅広い年代。お酒を飲みながら、被災したときの様子や、今後の復興について話し合っていました。飯塚さんは、「これまで昼間のお茶っこ会ではお見掛けしなかった方が、いっぱいいらしていました。本当にうれしかったです。コープかながわとコープとうきょうの皆さんは、何かをやってあげようとしすぎず、適度な距離感を保ち、居住者同士が語り合えるとても居心地のいいお茶会を開催してくださいました」と話していました。

コープかながわ組合員理事の斎藤好江（さいとうよしえ）さんは、「仮設住宅にお住まいの男性たちが集まると、自然と話が弾み、お互いに自分の被災したときの状況やこれからのことを本音で話されている様子が印象的でした。初めて会う私たちに深い話はなかなかできないと思います。みなさんが話し合える場をつくることが、まずは大切だと感じました」と話してくれました。

今後は、コープかながわ、コープとうきょうとも、組合員のボランティアを募集して、被災地でお茶っこ会を開催することが予定されています。

参加者からは、「こんなに人が集まって話したのは、はじめて」という声も。お酒を飲みながら、話は尽きない。

コープかながわ組合員理事のお土産である布草履（ぬのぞうり）。被災された方自身が作り、売ることで収入につながるのでは、という思いも込めてプレゼント。